

神奈川県立博物館研究報告

第1卷 第4号

考古・歴史・美術・民俗

BULLETIN OF THE KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

Vol. 1, No. 4

Archaeology. History. Fine Art. Folklore

神奈川県立博物館

KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

Naka-ku Yokohama, Japan

March 1971

目 次

は し が き

神 沢 勇 一 : 東京湾沿岸地域出土の貝刃について 1
Kanzawa Yūichi : On the Shell Blades at the Coastal area of Tokyo Bay

大 戸 吉 古 : 横浜開港のひとつの前提 一弘化3年の歴史的意義
について 19
Ōto Yoshiko : A Premise for Opening Yokohama Harber
— On the Historic Meaning of 1846 —

赤 星 直 忠 : ほ し い も の 39
Akahoshi Naotada : Things desired as historical records of the museum

はしがき

当館の研究報告第4号を発刊することとなりました。いうまでもなく、博物館における調査研究活動は、資料の収集・展示ならびに保管という仕事とともに、極めて重要であり鋭意努力を続けております。この報告書は人文関係の研究成果の一端をまとめたものであります。が、まだまだ十分とは申ません。大方のご叱正を賜り他日を期したいと考えている次第であります。

昭和46年3月

神奈川県立博物館長

斉藤太次郎

東京湾沿岸地域出土の貝刃について

On the Shell Blades at the coastal area of Tokyo Bay

神 沢 勇 一・川 口 徳 治 朗

Yūichi Kanzawa • Tokujirō Kawaguchi

1

貝刃は2枚貝の腹縁を加工して刃器として使用したもので、縄文時代の貝塚から発見される貝製品の一種である。いまのところ、上限は花輪台II式土器に、下限は安行I式土器に伴出することが知られており、また地域的には北海道から九州まで分布するものようであるが、東京湾沿岸および仙台湾沿岸に集中している。^(注1)^(注2)^(注3)

貝刃の在り方については、これまでに論じられることが比較的少く、二、三の見解が提示されているに過ぎない。しかし、近年、一遺跡から100例前後が一括出土する例もみられるようになり、貝刃の性格や機能あるいは年代的な位置を改めて考える必要が生じてきた。

さきに、我々は神奈川県・梶山貝塚から花積下層式土器に伴って出土した約100例の貝刃について調査した結果、形態と加工法に二、三の種類があり、またそれらの間にはある程度一定の組合せが存在することが認められた。このことは貝刃が一種の道具として存在したことを見出せるものであった。そこで、この結果を確認するため、類例を求めていたのであるが、その後東京湾沿岸の数遺跡から一括出土した貝刃を実見する機会に恵まれ、若干の知見を得ることができた。そこで、とりあえず東京湾沿岸という1単位をとって、梶山貝塚出土例の検討結果と比較しながら、貝刃について二、三の考察を行ないたいと思う。^(注4)^(注5)

なお、本稿については、横須賀市博物館、明治大学考古学研究室ならびに塚田光、熊野正也、後藤和民の諸氏に資料の提供をはじめ、種々のご助言を賜わった。稿を起すにあたり、記して厚く感謝の意を表わしたい。

2

本稿にとりあげた資料の総数は589例で、実見した585例に、報告書により出土状態ならびに細部の形状を具体的に察知し得るもの4例を加えた。遺跡別例数、時期は次のとおりである。

吉井城山第1貝塚（神奈川県横須賀市吉井町台崎）49例 茅山上層式、加曾利E II式・III式
^(注6~9)

梶山貝塚（神奈川県横浜市鶴見区上末吉町梶山）	101例 花積下層式
北川貝塚（神奈川県横浜市港北区新吉田町北川）	42例 花積下層式，諸磯a式
マカンド貝塚（神奈川県横浜市港北区新羽町）	26例 諸磯a式
向台貝塚（千葉県市川市本八幡）	150例 勝坂式，阿玉台式，加曾利E I式・II式
今島田遺跡（貝塚） ^(注10) （千葉県市川市柏井町）	35例 加曾利E I式・II式
加曾利北貝塚（千葉県千葉市桜木町京顛台）	77例 加曾利E I式・II式
加曾利南貝塚（千葉県千葉市桜木町京顛台）	95例 加曾利E I式・II式，掘の内式，加曾利B式，安行I式
称名寺貝塚（神奈川県横浜市金沢区金沢町） ^(注11)	2例 称名寺式
子和清水貝塚（千葉県松戸市子和清水） ^(注11)	8例 勝坂式，阿玉台式，加曾利E I式
とき ※鷺崎貝塚（千葉県佐原市鷺崎） ^(注12)	2例 花輪台II式
なたぎり ※蛇切洞窟（千葉県館山市浜田） ^(注13) (※は文献による資料)	2例 称名寺I式

以下、前述の課題に従って、素材、形態、製作技法に重点をおきながら、資料の比較検討を行なっていくことにする。

素材について

貝刃に使用された貝の種類は第1表に示したように、資料総数589例のうち、チョウセンハマグリ・ハマグリ=380(64.2%)、カガミガイ=120(20.5%)、シオフキ=34(5.8%)、オキシジミ=22(3.8%)、ミルクイ=14(2.4%)、アサリ=10(1.7%)、バカガイ=5(0.9%)、ウチムラサキ=3(0.5%)、サルボウ=1(0.2%)となっている。

全体として、チョウセンハマグリ・ハマグリが最も多く約3分の2を占める。とくに梶山貝塚の場合には93%という圧倒的な割合を示しているが、発掘時において、検出されることが他の貝殻より比較的容易である点を考慮しなければならないとも思われる。しかし、一方、北川貝塚、マカンド貝塚、今島田遺跡（貝塚）にはとくに頗著な例ではない。

チョウセンハマグリ・ハマグリに次いで多いのがカガミガイである。全体的にみるとその割合は低いが、今島田遺跡（貝塚）においてはハマグリの約2倍を占めている。シオフキはすべての遺跡に存在するものでないが、北川貝塚の場合はハマグリの約2倍になっている。オキシジミは貝刃の素材の中で最も殻のうすい貝で、シオフキ同様に全体としては数は少ないけれども、マカンド貝塚ではかなり目立っており、その数はハマグリを上回る。バカガイとウチムラサキは吉井城山第1貝塚だけにみられる。ミルクイは加曾利南貝塚の後期に8例とやや目立った存在を示している。なお、ミルクイ製の貝刃は刃部の剥離が明瞭でないが、殻がうすいため、刃部加工をせずに、そのまま使用されたことも考えられる。

次に貝刃の大きさは、使用された貝の種類そのものによってある程度の制約をうける。仮に貝刃の大きさを腹縁の端から端までの直線距離によって区分すると、チョウセンハマ



グリ・ハマグリでは5cm以下が9.2%, 5~6cmが40%, 7~9cmが41.6%, 9cm以上が9.2%となり、7~8cmのものが70%を占めている。ただし、北川貝塚、マカンド貝塚の場合は5cm以下の貝が多く用いているという特徴がみられる。カガミガイには5cm以下および9cm以上の例はなく、5~7cmが120例中116例(99%)を占める。シオフキ、オキシジミ、アサリなど小型の貝は特殊な例を除いて5cm以下となっているが、これは貝そのものの大きさによるものであって、大きさに特別な意味をみいだしがたい。バカガイ、ウチムラサキ、ミルクイ、サルボウは第1表から知られるように、きわめて少なく、特殊な例とみてよいと考えられる。

以上述べたように、貝刃の素材としては7~8cmのチョウセンハマグリ・ハマグリと5~7cmのカガミガイがきわめて特徴的な存在であるといえよう。これらはいずれも殻が厚く、刃を付けるのに適しているためと考えられる。しかしながら、北川貝塚、マカンド貝塚、今島田遺跡(貝塚)のように比較的淡水産の貝が繁殖した地域では、ハマグリが出土した貝の主体を占めているが、6cm以下の小型であり、あまりその成育に適さない環境にあったと考えられる。それに代わるものとして、今島田遺跡(貝塚)ではカガミガイが使用され、北川貝塚ではシオフキが使用され、また、マカンド貝塚ではオキシジミが使用されたのであろう。

形態的分類について

貝刀が道具として実際に機能をはたすとき、直接作用するのは刃部である。589例のうち刃部の保存状態の良好な539例について調べた結果、第2表に示したごとく、これらは刃の位置と幅から4群8類に区分することができる。なお、各群の特徴をあげるについて、記載の都合で、殻の種別を表示するのに、便宜上、腹縁を手前にして殻を伏せたとき、前背縁が左側になるものにL、右側になるものにRの記号を使用して区別することにしたい。殻の部分名は図に示したとおりである。

I 群・腹縁の片側に寄せて刃を付けたもの。

総数106例。腹縁に剥離を加えて直接刃を付けている。本群は刃の幅によってa, b 2類に細分できる（梶山貝塚出土の貝刀でI群としたものに相当する）。

a類 <挿図1-1, 2, 3, 図版1-26>

腹縁の片側の端に2~3回の剥離を加え、幅2.5~4cm程度の狭い刃を付けたもの（29例）。素材別はハマグリ17, カガミガイ3, オキシジミ4, シオフキ1, アサリ3, ミルクイ1となる。殻の種別ではL10例, R9例で、刃の位置は前背縁側に寄るもの8例、後背縁側に寄るもの21例ある。刃先はほぼ垂直に磨滅している場合が多く、また刃の後縁（刃を付けたとき剥離をうけた部分の末端）にも磨滅が認められる（2, 3, 26）。

b類 <挿図1-4, 5, 6, 7, 8, 同3-22, 図版1-27>

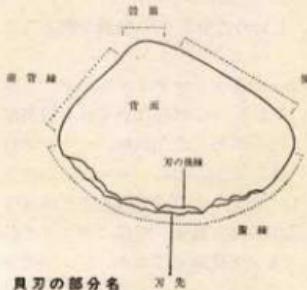
刃の幅がa類よりも広く、腹縁の片側から中央部にまで及ぶもの（78例）。素材別はハマグリ59, カガミガイ12, オキシジミ3, シオフキ3, アサリ1となる。殻の種別ではL39例, R39例と同数である。刃の位置は前背縁側に寄るもの5例、後背縁側に寄るもの73例ある。また、後背縁側に寄るにつれて、刃の幅、奥行きが狭まってくる（6, 7）。

II 群・腹縁のほぼ中央に刃を付けたもの。

総数355例。腹縁に剥離を加えて直接刃を付けている。本群も刃の幅によってa, b 2類に細分できる（梶山貝塚出土貝刀中II群a, b類としたものに相当する）。

a類 <挿図2-9, 10, 11, 図版1-10>

腹縁中央部分に2~3回の剥離を加え、幅2.5~4cm程度の狭い刃を付けたもの（27例）。素材別はハマグリ10, カガミガイ4, シオフキ9となる。殻の種別ではL18例, R9例で、ハマグリはLが多いのが目立つ。10は使用の結果、刃部および貝の背面がすべて擦痕を生じた例である。



b類 <挿図2-12, 13, 14, 15, 16, 同3-23, 24, 25, 図版1-15, 同2-30, 31, 32, 33>

腹縁のほぼ全体に剥離を加え、幅の広い刃を付けたもの（331例）。資料のうち約60%が本類に含まれる。I群b類の刃幅を延長した例（14）や、奥行きの深い例（23, 24, 25, 33）、浅い例（13, 32）がある。素材別はハマグリ

210、カガミガイ89、オキシジミ5、シオフキ14、ミルクイ13となる。ハマグリは梶山貝塚の資料に1例、殻の中央に穿孔したものがある。カガミガイの中には、腹縁中央に比較的広い刃をもつものが10例ある。また、ミルクイはベンガラが付着した例がある。殻の種別ではL183例、R148例となる。このうちカガミガイはL82例、R7例で、Lが圧倒的多数であることに注意したい。I群b類の延長形とみられる資料については、刃の位置がいくぶん後背縁側に寄っている。

III群・腹縁を大きく打ち欠いた部分に刃を付けたもの

総数52例。背縁および腹縁の奥深くまで打ち欠いて刃を付ける点で、I、II群と異なる。粗雑な形状を呈するので破損品とみなされやすいが、刃としての形状、背面の損耗が明らかに認められる。本群は打ち欠きの状態によって、a、b、c3類に細分できる（III群a類は梶山貝塚出土貝刃中に例がないもので、b類はIII群a類に相当し、同じくc類はIII群b類に相当する）。

a類 <挿図3-17、図版1-28>

背縁の片側から大きな打ち欠きを数回加え、幅4～5cm程度の刃を付けたもの（31例）。一般に刃の奥行きが深く、I群a類と類似するが、刃の磨滅や背面の損耗の度合いは本類の方がはげしい。素材別はハマグリ21、オキシジミ1、シオフキ3、アサリ3、ウチムラサキ3となる。殻の種別ではL12例、R19例で、刃の位置は前背縁側に寄るもの2例、後背縁側に寄るもの29例ある。刃先はどの例においても丸く磨滅しており、刃の付く側の背面には擦痕が認められることが多い。

b類 <挿図3-18、図版1-29>

前背縁と後背縁の両側から大きな打ち欠きを数回加え、全体に刃を付けたもの（16例）。一般に奥行きが深く、菱形を呈する。本例はすべて梶山貝塚の資料である。素材別はハマグリ15、オキシジミ1となる。殻の種別ではL11例、R5例で、後背縁側に大きな刃が付く場合が多く、磨滅の状態や背面の傷み方はひょうにはげしい。

c類 <挿図3-19、図版2-19>

腹縁を奥深く平均的に打ち欠き、全体に刃を付けたもの（5例）。全体の形は小さいが刃の奥行きは深い。素材別はハマグリ4、アサリ1となるが、小型の貝殻が選ばれているかのようである。殻の種別ではL3例、R2例となる。

IV群・腹縁の中ほどに自然面を残して刃を付けたもので、腹縁に剥離を加えて直接刃を付けている<挿図3-20、21、図版2-20>（梶山貝塚出土中貝刃に例がない）。

総数22例。刃部の状態はII群a類とあまりかわらない。素材別はハマグリ11、カガミガイ5、オキシジミ2、シオフキ2、アサリ1、サルボウ1となる。殻の種別ではL11例、R11例と同数である。自然面を狭む左と右の刃のようすは大きく異なるところはないが、後背縁側に付けられた刃の方がいくぶん幅広い。

以上に述べた形態の中で最も多く認められるのはII群b類で、第2表にみられるように全体の61.3%を占める。次いでI群b類14.3%，III群a類5.8%，I群a類5.4%，II群a類5.1%，IV群4.1%，III群b類3%，III群c類1%となる。

形態と貝の種類については、アサリ、ウチムラサキ以外はすべてII群b類が多数を占め

るが、オキシジミとシオフキは目立って多いというほどではない。オキシジミやシオフキのように殻頂がほぼ中央にあって、殻の小さい、厚みのない貝はそれほど刃の位置や幅に意味をもたないのかもしれない。カガミガイはⅢ群にまったく例がない。ウチムラサキはハマグリより殻が厚く、Ⅲ群a類にみられることはかなり強い力を加えて用いられたことを思わせる。

遺跡別にみると、梶山貝塚、北川貝塚、マカンド貝塚などの前期の資料の場合、Ⅱ群b類の数が少なく、梶山貝塚では過半数を割り、北川貝塚ではⅡ群a類が、マカンド貝塚ではⅠ群a類が多数を占める。これに対して、向台貝塚、今島田遺跡（貝塚）、加曾利北貝塚、加曾利南貝塚、子和清水貝塚などの中期の資料はⅡ群b類が70%以上を占め、他の形態はきわめて少ない。しかしながら、数こそ少ないがⅠ群a類とⅢ群a類が存在したこと、Ⅱ群b類と異なる用途をもっていたことを考えてよいかもしれない。このようなことは、加曾利南貝塚、称名寺貝塚などの後期の資料にも、同様な傾向が認められ、ハマグリ・カガミガイが多く、刃部は整っている。

殻の種別を集計するとL287例、R252例となる。ハマグリ、オキシジミ、アサリ、ミルクイ、ウチムラサキは傾向としてややRが多い。カガミガイはL101例、R12例ときわめてLが多い。このことから殻頂がほぼ中央にあるカガミガイでも、使用する際、Lでなければならぬ何らからの理由があったのではないかと思われるが、ここではL、Rの比較よりも刃の位置が一般に後背側に寄っていることに注目しておきたい。

3

前項で貝刃を刃の位置および幅によって4群8類に細分したが、刃を中心にしてみた場合、刃の奥行きが深いものと浅いもの、剥離の幅が規則的なものと不規則なものに大別できる。刃の形状の変化は使用の結果生じたのではなく、刃を加工する際の技術と関係するものと考えられる点がみうけられるので、製作技法（刃の加工）と使用痕の関係について二三述べておきたい。

貝刃の刃は調べた範囲では、いずれも内側からの押圧剥離によって付けられているが、刃部加工は細部の加工方法によっておよそ6つのタイプに区分できる（第3表）。識別可能総数は527例である。

A型 <挿図1-2, 8, 同2-9, 11, 同3-17, 20, 図版1-28, 同2-20, 同3-20>

不規則的な幅で剥離を連続的に加えたもの。剥離具の角度が一定せずに乱雑な剥離が行なわれており、たとえば同一個体の中でも幅が3mmから1cm以上まで変化するため、きわめて粗雑な形状を呈す場合が多い（11, 17）。また、剥離の深さも一定せず、次に述べるB型の場合と異なって、刃の後縁が波状に連なるとはかぎらない（11, 17）。総数180例。

B型 <挿図1-1, 3, 4, 5, 6, 7, 同2-12, 13, 図版1-27, 同2-30, 31, 32, 同3-27, 30, 32>

規則的な幅で剥離を連続的に加えたもの。

総数208例。剥離の幅は狭いものが3~5mm、広いものが6~8mm程度である。前者は刃先と刃の後縁がなす角度が70°~90°で、剥離の深さは3mm前後となり、刃の後縁には磨滅のあとが顕著にのこる(4, 6, 12, 13)。個体によって剥離の幅は多少異なるが同一個体中の幅はほぼ一定しているのが本型の特徴といえる(1, 3, 27)。II群b類に属するものに最も多い。また、傾向として、前背縁側から後背縁側に向かって剥離の幅、奥行きが次第に狭まる例がいくつかみられ、この場合は剥離の順序もだいたいこの方向に行なわれたと認めてよさそうである(4)。

C型 <挿図2-16, 同3-18, 21, 図版1-29, 同3-29, 34>

A型と同様な手法で粗い剥離を行なったうえで(1次加工)、さらに不規則な剥離を連続的に加え(2次加工)、鋭利な刃先をつくり出したもの。ただし2次加工の剥離は1次加工のそれよりこまかい。

総数64例。刃の奥行きは深く、1次加工と2次加工の剥離の方向はかならずしも一致しない。また、2次加工によってできた刃先の角度は70°前後が一般である(16, 21)。ハマグリ以外に類例はない、II群b類に多いが、I群b類においても数こそ少ないがその半数をみると。

D型 <挿図2-14, 同3-19, 図版2-33, 図版3-33>

A型と同様な手法で粗い剥離を行なったうえで(1次加工)、さらに規則的な剥離を連続的に加え(2次加工)、鋭利な刃先をつくり出したもの。ただし、2次加工の剥離は1次加工のそれよりこまかい。2次加工によってできた刃先はC型と同様に75°前後の角度をもっているのが一般的である。

総数25例。刃の奥行きは深く、1次加工と2次加工の剥離の方向はかならずしも一致しない。ハマグリ以外に類例はない。

E型 <挿図2-10, 図版1-10, 同3-10>

B型と同様な手法で剥離を行なったうえで(1次加工)、さらに不規則的な剥離を連続的に加え(2次加工)、鋭利な刃先をつくり出したもの。ただし、2次加工の剥離は1次加工のそれよりこまかい。

総数13例。全体で最も少なく、ハマグリ以外に類例はない。1次加工と2次加工の剥離の方向はかならずしも一致しない。10は1次加工で、1~1.5cmの幅で奥深く剥離し、さらにその中に4~5回の剥離を行なった例である。2次加工の剥離角度はかなり急で約80°になっている。

F型 <挿図2-15, 図版1-15, 26, 同3-15>

B型と同様な手法で1次加工を行なったのち、さらに規則的な剥離を連続的に加え(2次加工)、鋭利な刃先をつくり出すもの。2次加工の剥離は1次加工のそれよりこまかい。2次加工の剥離角度は70°前後である。

総数37例。ハマグリに類例が多いが、カガミガイに4例ある。1次加工と2次加工の剥離の方向はこの場合も一致しないことがある。

以上の結果から、剥離の型式はB型が最も多く、A型、C型、F型、D型、E型の順になる。つまり、全体的にみると1次加工による場合(A, B型)が70%となる。その形態

別では I 群 b 類、 II 群 b 類の大部分がこれに属し、 その他の形態では A 型が多い。 I 群 b 類は A 型に 33.8% 、 B 型に 46.7% みられ、 II 群 b 類は A 型に 25.8% 、 B 型に 46.8% みられる。 I 群 b 類は形態が II 群 b 類に類似し、 総数でこれに次ぐ点などを考えれば、 きわめて近縁的な一群と考えてさしつかえないであろう。 III 群 a 類、 b 類、 c 類は形態そのものが粗雑であり、 刃部および背面の磨滅や剥落が著るしい。 刃先にみられる小さな剥離痕は 2 次加工によるものか、 使用の痕跡か識別しがたい例が多い。

いま述べた貝刃の形態と製作技法の組合せの要素としては、 素材となった貝の種類による技術的な制約もあると思われる。 ハマグリが各型式に含まれることは、 2 次加工が可能な素材であることを示すものであろう。 なお 1 次加工だけの場合もハマグリやカガミガイのように殻の厚い貝は、 1 回の連続剥離で、 ある程度整った刃を付け得たと理解してよいのではなかろうか。

使用痕については、 擦痕、 刃こぼれ、 磨滅などが認められる。 擦痕は腹縁寄りの背面から殻頂にむかって顯著にみられる。 I 群 a 類と I 群 b 類は後背縁側に擦痕をこす例が多く、 これらはいずれも使用の痕跡であり、 ある期間継続して使用されたことを示すものにはかならない。 擦痕の幅は 0.1 ~ 0.2 mm のこまかいもので、 背面なればまで擦痕がとどくこともある。 また、 刃に対して 60° ~ 90° の角度で走ることがあり、 多くの場合、 右傾、 左傾し、 走向が一定しない。 この部分は粗面となることが多い。 刃こぼれは幅 1 ~ 2 mm 程度で連続するものと (33) 、 刃先全体が剥げ落ちるものとがある (13) 。 前者は II 群 b 類の A 型に多い。 後者は II 群 b 類の B 型に著るしく、 とくにわずかにのこる刃先と刃の後縁がなす角度は急で、 刃の後縁の磨滅が著しい。 刃先の磨滅は一般には、 刃先から刃の後縁にかけてみられる。 なかには刃部以外の腹縁にまで及ぶことがある (34) 。 刀先は波状の突出部が完全に消滅するまでになった例 (29, 34) と、 原形をとどめる例 (21) がある。 カガミガイおよび I 群 a 類、 I 群 b 類のハマグリの中には、 背面上部約 4 cm² の範囲にわたって磨耗を認める例があり (30, 31) 、 これは明らかに擦痕と異なっている。 III 群 a 類、 b 類、 c 類は背面の擦痕、 刃部の剥げ落ち、 磨滅の状態がはげしく、 かなり強い力を加えて使用したものであろう (29) 。 このほかに、 使用のさい生じた欠損の例もあると思われるが、 風化などのため識別しがたく、 触れなかった。

4

前 2 項で述べた貝刃の形態と製作技法の分析結果にもとづいて、 それらの関係をみると次のようになる。

まず、 刃幅の広狭によってまとめてみると、

(1) 刃幅の狭い貝刃 (I 群 a 類、 II 群 a 類、 III 群 a 類、 IV 群) では、 製作技法は 114 例中、 A 型 = 67 例 (58.8%) 、 B 型 = 22 例 (19.3%) 、 C 型 = 12 例 (10.5%) 、 F 型 = 8 例 (7.0%) 、 D 型 = 3 例 (2.6%) 、 E 型 = 2 例 (1.8%) となる。

(2) 刃幅のやや広い貝刃 (I 群 b 類) では、 製作技法は 77 例中、 B 型 = 36 例 (46.7%) 、 A 型 = 26 例 (33.8%) 、 C 型 = 8 例 (10.4%) 、 D 型 = 3 例 (3.9%) 、 E 型 = 2 例 (2.6%) 、 F 型 = 2 例 (2.6%) となり、 1 次加工だけの A 型および B 型が 80.5% を占める。

(3) 刃幅の広い貝刃（II群b類, III群b類）では、製作技法は336例中、B型=150例(44.6%), A型=87例(25.9%), C型=44例(13.1%), F型=27例(8.0%), D型=19例(5.7%), E型=9例(2.7%)となる。なお、このうちB型, E型, F型の製作技法はII群b類に限定されている。

要約すると、刃幅の狭い貝刃では、A型, B型の技法による(1次加工だけで製作された)貝刃が89%, 刃幅のやや広い貝刃では、A型, B型の技法による貝刃が80.5%，また刃幅の広い貝刃では、A型, B型の技法による貝刃が70.5%で多数を占め、とくにB型がその約半数を占める点が注目される。したがって、全体としては1次加工だけで製作された貝刃が多数を占めていることが知られる。

一方、各群・類別に主体的な製作技法との関係をみると、第3表に示したように、同じ1次加工でもA型が主体をなすのは、I群a類, II群a類, III群a類, III群c類およびIV群であり、B型が主体をなすのは、I群b類とII群b類である。また、III群b類ではC型が約3分の2を占めている。

この結果から、貝刃の形態と刃の付加手法には絶対とは言えないまでも、ある程度の組合せが存在することが認められる。したがって、梶山貝塚出土の貝刃が形態と製作技法の組合せに一定の傾向をもっていたことは、決して特殊——あるいは偶然の結果ではないと考えられる。今回の検討においては、資料のうちに梶山貝塚出土例も含めて扱っているが、589例中101例(17.1%)にすぎず、これらを除外しても、この傾向は否定できない。

ただ、梶山貝塚出土例とそれ以外の諸例について、形態と製作技法との関係、比率をみると、梶山貝塚出土例では1次加工49例、2次加工52例で、さほど差がないのに対し、今回の検討結果では前述のように、1次加工が70.5%と大多数を占めている点が注意される。今回の検討資料の時間的範囲は早期から後期まで入っており、各時期的にみたときには資料がかなり片寄るため、時期別に、形態、製作技法、素材の変化等を分析できなかつたので断定はできないが、さきの結果を一応南関東地方の貝塚の平均値として考えた場合、梶山貝塚出土例が示す数字は、少くとも時期または地理的環境(あるいはその両方)によって素材の相違や、形態・製作技法が異なる可能性を暗示するものであろう。たとえば、第1表に示したように、同じ前期でも梶山貝塚よりもかなり奥に入った北川貝塚(花積下層式期)では、貝塚を形成する貝の大部分はきわめて小型のハマグリであり、貝刃として使用するには不適当であったことが考えられ、シオフキ製貝刃が19例、ハマグリ製貝刃(北川貝塚においては大型のもの)が10例となっており、また、今島田遺跡(貝塚)においては、カガミガイ製貝刃が21例、ハマグリ製貝刃が11例で、比較的近距離にある向台貝塚、加曾利北貝塚、加曾利南貝塚、さらに子和清水貝塚など、同じ中期の諸遺跡発見例と異なった傾向をもつことを注意したい。

次に使用痕については、資料の90%以上に明確に認められる。使用痕は主として刃先と刃の後縁の磨滅で、ほかに殻の背面に残った擦痕がある。刃部の磨滅はI群b類、II群b類、III群a類のうち、1次加工(B型の製作技法により刃を付けたもの)に目立つてゐる。

このように、刃部の磨滅はかなり多いのであるが、刃の運動方向を示す明瞭な擦痕が残

っている例は少ない。ただ、I群a類、II群a類のように刃幅の狭いものでは、背面にしばしば不特定方向あるいは斜行する擦痕がみられる。2の梶山貝塚出土の貝刃は後者の典型的な例である。この種の貝刃においては、刃と運動方向のなす角度は60°～90°程度と測定され、梶山貝塚出土の貝刃の報告で指摘したように、scraper（搔器）としての機能が考えられる。しかしながら、今回、多数の資料を調査してみると、II群b類のように刃幅の広い貝刃においては、刃全体に磨滅がみられ、さらに刃に接続する腹縁もやや広い範囲にわたって磨滅しており、一方、殻の背面には刃幅の狭い貝刃にしばしばみられるような擦痕はほとんどないと言ってよい。刃の運動方向を証する確実な痕跡は確認できなかったが、刃の幅が広いこと、刃全体が平均的に磨滅し、さらに腹縁にまで及んでいる点で、この種の貝刃には搔器としての機能ばかりでなく、刃を前後——刃と同一方向——に動かした一種の切断具として製作、使用された可能性が多分にあると考えてよいかもしれない。

最後に貝刃の素材——とくに、殻の左右別——の問題に触れておきたい。梶山貝塚出土例だけについて言うと、前に報告したように、L = 287例(53.3%)、R = 252例(46.7%)で、その差はきわめて少なく、刃幅によって（前に述べたのと同じ一群を単位とする）大別してみても、(1) 刀幅が狭いものでは、114例中、L = 54例(47.4%)、R = 60例(52.6%)。(2) 刀幅のやや広いものでは、78例中、L = 39例(50.0%)、R = 39例(50.0%)。(3) 刀幅の広いものでは、347例中、L = 194例(56.0%)、R = 153例(44.0%)で、LとRはほぼ半数となっている。したがって、梶山貝塚出土例における数字は、やや差がありすぎると思われるが、この点も時期的あるいは地域的問題との関連を考えさせるものである。

調査結果の概要是以上のとおりである。地域的、時間的な面で資料に片寄りがあり、方法論的にも不備な点はまぬがれがいたため、必ずしも所期の目的を達したとは言いがたい。しかしながら、少なくとも、貝刃はきわめて素朴な形態を有する貝製品であるが、明らかに利器として使用されたものであり、形態と製作技法にある程度一定の組合せが存在するなどの点で、縄文時代における利器の一形態として認められるべきものであることは確実になったと言えよう。

貝刃については未解決の問題が少なからず残っている。それらについては、さらに資料の蓄積と検討を行ない、機会をみて本稿の欠を補うつもりである。

注

- (1) 西村正衛「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚—第2・3次調査」早稲田大学教育学部学術研究3号 1954年
- (2) 西村正衛・金子浩昌「千葉県香取郡鶴崎貝塚」古代 33号 1960年
- (3) 加曾利南貝塚IV—2 トレンチ23—24グリット、第4層(安行I式)よりカガミガイ製貝刃が出土していることを後藤和民氏から御教示いただいた。
- (4) 芝崎 孝「貝刃」下総考古学 1 1964年
- (5) 神沢勇一・川口徳治朗「梶山貝塚出土の貝刃について」神奈川県立博物館研究報告 第1巻第2号 1969年
- (6) 赤星直忠「横須賀市吉井城山第1貝塚調査概報(1)」横須賀市博物館研究報告(人文科学) 6号

1962年

- (7) 神沢勇一「横須賀市吉井城山第1貝塚出土の骨角牙器・貝製品(1)」 横須賀市博物館研究報告(人文科学) 6号 1962年
- (8) 赤星直忠「横須賀市吉井城山第1貝塚調査概報(2)」 横須賀市博物館研究報告(人文科学) 7号 1963年
- (9) 神沢勇一「横須賀市吉井城山第1貝塚出土の骨角牙器・貝製品(2)」 横須賀市博物館研究報告(人文科学) 7号 1963年
- ⑩ 熊野正也「今島田遺跡」市川市文化財調査報告第1集 1969年
- ⑪ 高橋良治・塙田 光・小片 保「千葉県子和清水貝塚調査概報」考古学雑誌 第49巻第2号 1963年
- ⑫ (2)に同じ。
- ⑬ 千葉県教育委員会「船山鉈切洞窟」 1953年
- ⑭ 岩山貝塚出土例については、その後、さらに検討を加えた結果、101個全部について類別を行うことができた。したがって、前報告では、有効資料が70例であったが、ここでは101個の分析結果を使用した。しかし、前回、今回とも比率はほぼ同じである。

第1表 遺跡別にみた貝刀の素材

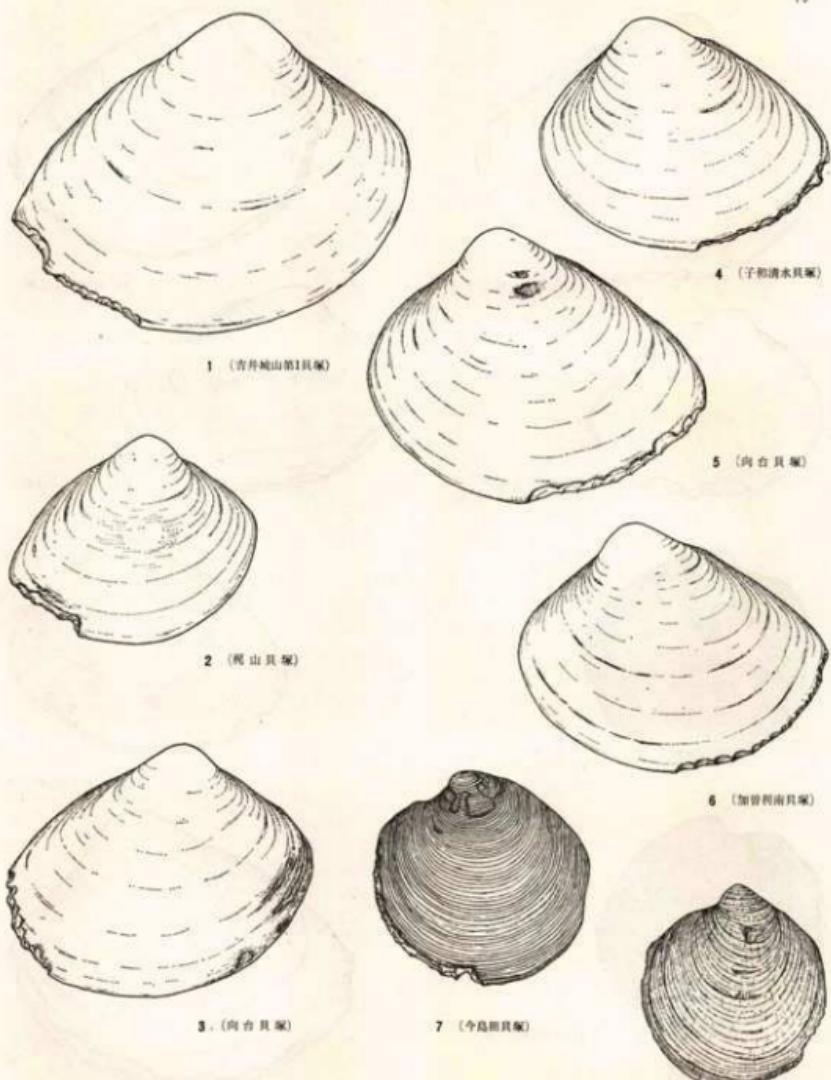
No.	遺 跡	時 期	手・ ヨハ ウセマ ンゾン ハグ マグリ リ	カ ガ ミ ガ イ	オ キ シ ジ ミ	シ オ フ ジ ミ	ア サ リ	バ ガ イ	ミ ク イ	カ ル イ	ウ チ ム ラ サ キ	サ ル ボ ウ	計
1	千葉県・鴨崎貝塚	早 期	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
2	神奈川県・吉井城山第1貝塚	早 期	24	4	0	1	1	4	2	3	0	0	39
		中 期	6	0	0	0	0	1	3	0	0	0	13
3	神奈川県・梶山貝塚	前 期	94	5	2	0	0	0	0	0	0	0	101
4	神奈川県・北川貝塚	前 期	10	2	3	19	7	0	0	0	0	1	42
5	神奈川県・マカンド貝塚	前 期	10	1	13	1	1	0	0	0	0	0	26
6	千葉県・向台貝塚	中 期	91	55	2	1	1	0	0	0	0	0	150
7	千葉県・今島田遺跡(貝塚)	中 期	11	21	0	3	0	0	0	0	0	0	35
8	千葉県・加曾利北貝塚	中 期	62	14	1	0	0	0	0	0	0	0	77
9	千葉県・加曾利南貝塚	中 期	30	2	1	3	0	0	1	0	0	0	37
		後 期	33	11	0	6	0	0	8	0	0	0	58
10	千葉県・子和清水貝塚	中 期	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0	8
11	神奈川県・称名寺貝塚	後 期	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
12	千葉県・鉈切洞窟	後 期	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
計			380	120	22	34	10	5	14	3	1	589	

第2表 貝 刃 の 形 態

貝・殻の種別		ハマグリ	カガミガイ	オキシジミ	シオフキ	アザリ	ミルタイ	ウチムラサキ	サルボウ	バガイ	類別集計	累計
形態		(L) (R)	(L) (R)	(L) (R)	(L) (R)	(L) (R)	(L) (R)	(L) (R)	(L) (R)	(L) (R)		
I	a	17 (7)(10)	3 (2)(3)	4 (4)(8)	1 (1)	3 (1)(2)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	(10)(19)	29
	b	59 (27)(32)	12 (9)(3)	3 (3)(1)	3 (2)(2)	1 (1)(0)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	(39)(39)	78
II	a	10 (8)(7)	4 (3)(1)	4 (1)(1)	9 (3)(6)	0 (3)	0 (0)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	(18)(9)	27
	b	210 (86)(124)	89 (82)(7)	5 (7)(2)	14 (3)(8)	0 (6)	13 (5)	0 (8)	0 (0)	0 (0)	(183)(148)	331
III	a	21 (9)(12)	0 (1)	1 (0)	3 (1)	3 (2)(0)	0 (3)	0 (1)	3 (2)	0 (0)	(12)(19)	31
	b	15 (11)(4)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	(11)(5)	16
	c	4 (2)(2)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	(3)(2)	5
IV		11 (3)(8)	5 (5)(0)	2 (2)	2 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (1)	1 (0)	1 (1)	(11)(11)	22
貝・殻の種別集計		(133)(194)	(101)(12)	(7)(13)	(16)(14)	(7)(7)	(5)(9)	(1)(1)	(0)(0)	(1)(1)	(287)(252)	
累計		347	113	20	32	9	14	3	1		539	

第3表 貝刀の形態

刃の型式 形態	1次加工		2次加工			類別累計	
	A	B	C	D	E		
I	a	16	7	3	0	0	28
	b	26	36	3	3	2	77
II	a	19	6	2	0	1	30
	b	83	150	35	18	9	322
III	a	14	9	3	1	1	31
	b	4	0	9	1	0	14
	c	3	0	0	1	0	4
IV		15	0	4	1	0	21
型式別累計		180	208	64	25	13	527

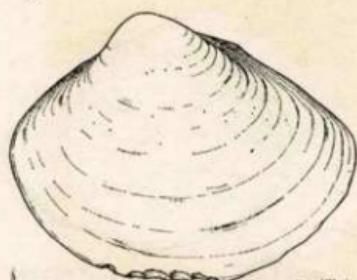


掉 因 1

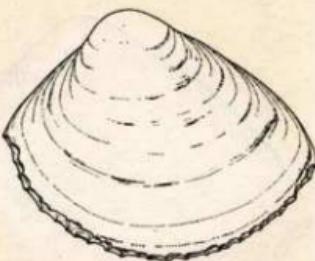
I 群 a類 = 1, 2, 3

I 群 b類 = 4, 5, 6, 7, 8

16



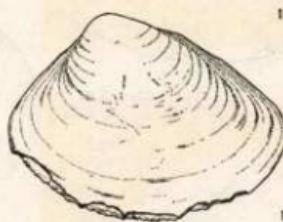
9 (桜山貝塚)



13 (子和清水貝塚)



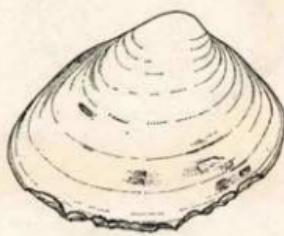
10 (桜山貝塚)



14 (加曾利南貝塚)



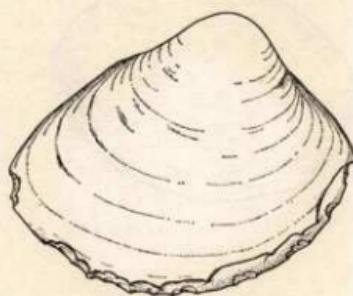
11 (桜山貝塚)



15 (吉井城山第1貝塚)



12 (加曾利北貝塚)



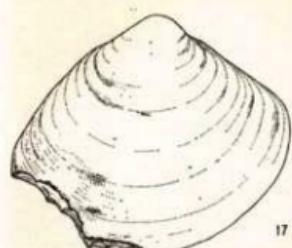
16 (向古貝塚)

0

10mm



挿 図 2 II 群 a類=9, 10, 11
II 群 b類=12, 13, 14, 15, 16



17 (向右貝屬)



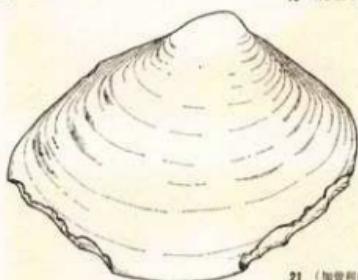
20 (北川貝屬)



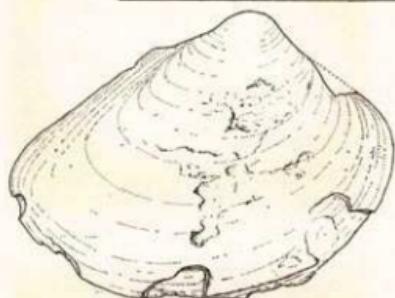
19 (程山貝屬)



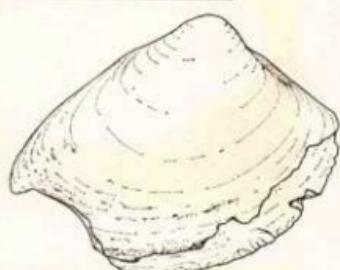
18 (程山貝屬)



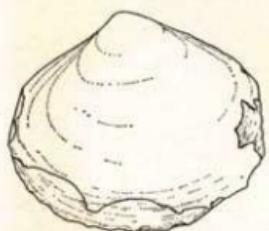
21 (加魯利南貝屬)



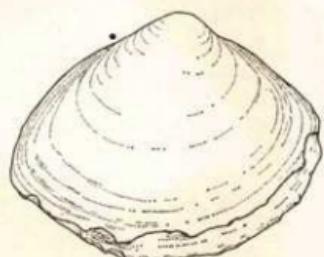
22 (諸葛貝屬)



23 (諸葛貝屬)



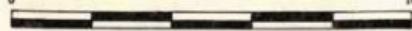
24 (沈切貝屬)



25 (沈切貝屬)

0

10-



攝 図 3

(上) III 群 a 類 = 17.

III 群 b 類 = 18.

III 群 c 類 = 19.

IV 群 —— = 20, 21.

(下) I 群 b 類 = 22.

II 群 b 類 = 23, 24, 25.



26 (I a)

59×72mm



27 (I b)

55×71mm



10 (II a)

53×68mm



15 (II b)

51×66mm



28 (III a)

50×53mm



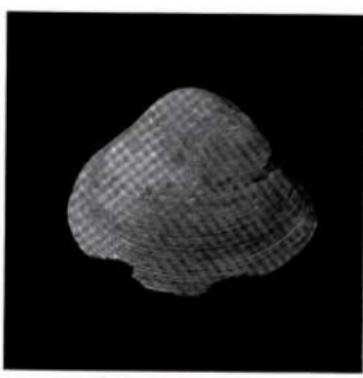
29 (III b)

53×67mm

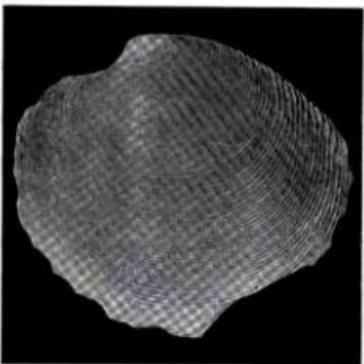
図版 1 10=E型(梶山貝塚) 15=F型(吉井貝塚) 26=F型(梶山貝塚)
27=B型(梶山貝塚) 28=A型(梶山貝塚) 29=C型(梶山貝塚)



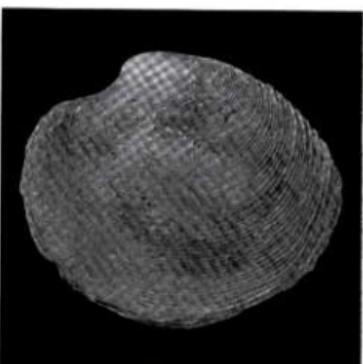
19 (III c) 42×49mm



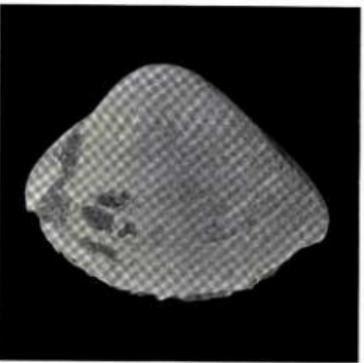
20 (IV) 42×52mm



30 (II b) 63×72mm



31 (II b) 61×73mm

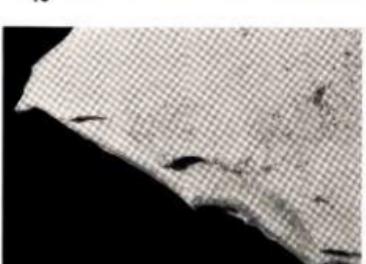
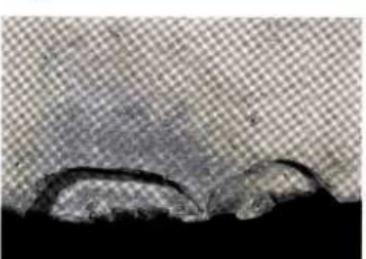


32 (II b) 53×69mm



33 (II b) 60×84mm

図版 2 19=D型(吉井貝塚) 20=A型(北川貝塚) 30・31=B型(称名寺貝塚)
32=B型(吉井貝塚) 33=D型(桃山貝塚)



図版 3 A型=20 B型=27, 30, 32 C型=29 (刃先磨滅)
D型=33 E型=10 (擦痕) F型=15
34 (刃先磨滅) 背面の磨耗=31

ほ　し　い　も　の

Things desired as historical records of the museum

赤　星　直　忠

Naotada Akahoshi

神奈川県立博物館は、神奈川県という一つの地方を理解するための施設である。その平面的範囲は県内全域にわたり、時間的範囲は神奈川県という地域の成立の初から、現代に及ぶものであり、その基盤を構成する地質・地形は勿論、その上に生活した各時代の動植物の状態からその環境の中に人類がどのように生活したかを理解しようとするものである。

その中で我々が特に知りたいと努力していることは庶民祖先の生活の歴史である。考古部門・民俗部門は大体において庶民生活資料を扱っている。考古は地下に残されたわずかの遺物とその埋没状態から、それを残した人達の生活とその環境とその文化をさぐろうとする方法である。それは書かれたもの全くない県民祖先を研究する方法の一つである。民俗研究は現在に伝えられた生活用具を通してそれに伴う広い生活を中心に、伝承された諸行事や物語を通して祖先の生活を知ろうとするもの。それは忘られようとする近代庶民の生活なのである。民俗研究はくさらないものだけがわずかに残っている資料から、その生活を推察しようとする考古学的研究の暗示になることがしばしばある。

我々が知らされている古代・中世・近世にかけての歴史は時代の頂点に立つ人物——代表者・花形的人物・英雄といったものを中心とした物語が主であり、その生活や文化が重点になっていて、それを支えたその時代の庶民のすがたは知られにくい。時代を象徴する代表的人物の活躍状況はその時代を知るために必要であることは勿論である。しかしそれだけに終っては県民祖先のあるがままのすがたを知ることができない。その時代を支えた数多くの庶民の生活も知りたいのである。しかし庶民の生活を知る資料はほとんど伝えられていない。文献中に全然なくはない。絵巻にもみられる。男糸三郎絵巻・長谷雄斐紙・絵師草紙・福富草紙・遊行上人縁起絵・一遍聖絵・餓鬼草紙・病草紙など、現存する絵巻から庶民生活の一部をさがしだすことができる。これらの絵巻から庶民生活に関係のある部分だけをぬきだした研究書が既にある。浜沢敬三編「日本常民生活絵引」(全五卷——角川書店刊)である。用具のある生活場面をぬきだし、用具の名称をあげている。頗る便利なものであり、庶民生活を理解するに極めてよい本である。しかし絵でみてわかつてもそれは結構絵でしかないのであって、ほんとにわかったのではない。できるならそれらの実物がほしいのである。特に博物館陳列資料としては是非ともほしいのである。今どきそんなものが手に入るはずがないときめてしまう前に、何とか手に入る方法はないかを考え

るべきであろう。こうした考を常に持つていれば、いつかどこかでそれが手に入らぬでもない。私はそう考えて長い間、注意をつづけてきた。鎌倉での長い勤務中に鎌倉の地下に中世の諸々の生活用具が埋没していることを知った。そして土木工事現場には必ずちよつと掘り出された土を詳細にみることにしてきた。鎌倉を去って後も、用事で鎌倉に行くたびに工事場の土に注意をつづけてきた。工事場の土にまじってどんなものが実際にでたかの例をいくつかあげることにする。それは手に入らぬと思われていた中世庶民生活を目のあたりにみることのできる資料が存在することを物語るものなのである。

○鎌倉市旧師範学校内の例

師範学校があったころ暇さえあれば校庭をみて歩いた。雨後には必ず何かが出ているからである。素焼皿（かわらけ皿）・常滑焼壺断片・青磁断片。古銭もひろえたし、備の破片も採集したことがある。滑石製鍋断片や菊花文をおした手あぶり断片もあった。厚さ1.5cmくらい、1辺10cmくらいの滑石製矩形の板半欠もひろったことがある。それは一端の中央に穴が一つあるから紐でさげたものであろう。紐ですれた穴の上部分がへっている。長さは不詳。用途も不詳。これと同じものと思われる完形品1と半欠1を、どこの工事場だったか覚えていないが、その後ひろっている。どれも似た大きさであり、一端に穴があり、紐でさげたことがわかる。今ではそれを石製の方盤（楽器）だらうと思っている。

昭和8年ころ、師範学校付属小学校小使室わきに井戸を掘ったときのことである。現地表から270cm~300cmに泥土層があり、泥土にまじって素焼皿（かわらけ皿）断片・常滑焼壺断片・木片・木箸とその断片・半円形薄板製品・鉄片・へら状骨製品断片・瓦片・骨片・貝殻（ハマグリ・アワビ・ダンベイキサゴ・アカニシ）などが発見された。これらは伴出の瓦片が鎌倉後期のものであることによってその時期を判定することができたが、それらは鎌倉各所で出土する庶民資料と大差ないものだった。へら状骨製品断片は幅2cmくらいのもので一端が直角に切ってあるコーガイ様のもの。長さは7~8cmで折れていた。木片の中には径1cmくらい、長さ15cm内外の棒が数本ある。断面形は不定。削ってはあるが特に何かの形に整えたものはない。縦巻にててくる糞棒であろうと思っている。

昭和35年、用事があって付属小学校を訪れたとき、校舎東方に積みあげられた土があるのを見て、詳細にみていたとき、素焼皿片・常滑焼片・木片・木箸断片にまじってひどくさびた鉄片を採集した。家に帰ってから時間をかけて錆を除いたら、それは火打鉄だった。

○鎌倉市びわ小路の例

鎌倉市教育委員会が下馬付近のびわ小路にあったとき、委員会前道路でガス管埋設工事が行なわれた。掘り出された土中に庶民資料があることに気付いた社会教育課員によって常滑焼壺断片・素焼皿・夜光貝断片・木箸及び断片・作業用小刀（茎半欠）が採集された。

○鎌倉市小町水道工事現場の例

小町通の水道工事現場で掘りだされた土中に素焼皿（かわらけ皿）断片・常滑焼壺断片・木箸断片・木片などにまじって破損した和鏡があるのを通りかかって採集した。菊座紐双

鳥梅花散文鏡（平安末期）であった。又別の場所で火打鉄の断欠や櫛断欠を採集した。先を薄く丸くした骨製へら状のものも採集した。指の先のような形で爪の部分に黒漆がぬっており、それにつづいて数本の細い平行線がある。反対の末端近く小さい丸穴がある。琴の爪のような形である。弦楽器をひくときの爪と考えればふさわしい用途だが実際の用途はまだわからない。漆器断片も各所で採集した。黒漆塗皿の内面に数羽の鶴がとぶ図柄のものもあったし、藤の花や若松とみられる図柄もあり、岩をあらわした風景の一部もみられた。漆器断片には特に注意したからかなり採集された。

○鎌倉市稻村ヶ崎土捨場の例

昭和38年から39年にかけて鎌倉市内各所に水道工事が行なわれたが、このときの土の捨場は稻村ヶ崎の市営水泳場付近の山間だった。水道工事場の土中から木箸・素焼皿などがでていることを知り、土の捨場を教えられたものである。海岸道路と山裾との間のくぼ地が土捨場になっていた。38年10月、鎌倉市小町通下水道工事現場に通りあわせ、土中に素焼皿や木箸断欠・杭などの木片が出土しているのを知って土捨場に急行し、捨てられた土をかきまわして庶民生活資料を採集した。素焼皿断欠・常滑焼断欠・木片多數・貝殻（ハマグリ・キシヤゴ）などであったが、木片中に柄を失った小形の木製鋤の完形品があった。その後11月になって再び土捨場へゆき下駄1・作業用小刀1を採集した。その後何度も出かけて土をかきまわし（表面だけだが）庶民生活資料の断片を採集した。多くの木材断欠にまじって建築遺材と思われるほぞやはぞ穴のある木材や先を尖らせた杭もみられたが、採集品中には下駄1、横長の四花形をほりこんだ矩形の木槽のほかに曲物断欠・曲物桶の底板・桶形をした薄板の一端に小穴のある木製品（同形のもの大小数個）があるほか、どこでも出る素焼皿及びその断欠・常滑焼壺片・古瀬戸断欠・青磁片・木箸があった。特に注意して採集したのは漆器断欠で、黒漆塗の皿形や椀形のものの断欠であり、多くは木部が朽ち失なわれ漆部分だけになっていたが、朱漆で色々な絵がかいてある珍らしいものだった。

○鎌倉市由比ヶ浜土捨場の例

昭和37年から38年にかけて海岸道路敷を造成中だったから鎌倉各所から土が運ばれてきていたが、水道工事・下水工事などでた土も運ばれていた。38年1月、滑川河口の東側の土捨場で下駄資料を採集しようと土をかきまわしてようやくすりへった下駄1を採集したが、このとき多くの木片の中から漆塗盆断欠・木箸及びその断欠のほか常滑焼壺断欠・青磁茶碗断欠・古銭を採集した。この漆塗盆は復元径約17.4cm、高さ1.8cmのもので全面を黒漆塗にしたもので、内面周約2.5cm幅だけを丹漆塗にしたものである。

○鎌倉市二階堂小字薬師堂谷入口の例

鎌倉宮北側に自動車駐車場工事のため川道を山際へ変更する工事が行なわれた。この工事中、山裾を切りとった部分に泥岩中にはりこんだ一辺150cmほどの方形井戸二個が近接してあらわれた。昭和34年1月9日覚園寺住職大森順雄師が通りかかって、井戸中からほり出された土中にあった遺物を採集した。木製下駄3・木製しゃもし1・常滑焼壺1である。ほかに素焼皿片や木箸断片があったという。

○鎌倉市浄明寺河川改修工事場の例

昭和34年11月、鎌倉市浄明寺交番前で河川改修用掘削工事が行なわれていた。掘られた断面でみると、地表下3mに青黒色粘土層が地盤を形成し、旧河道がこれを削って流れたあとが大きく不正形の弧状断面をだしていた。この河道には泥岩塊の丸くすりへったものが砂とともに堆積して旧河床に1m~1.5mを埋めていたが諸種の遺物はこの堆積層内に混在した。旧河床に近い10~15cmまでの間には弥生式土器片（後期、弥生町期と思われる）が粗に混在し、その上部若干の間（50cmくらい）は無遺物層となり、それより上の厚さ1mばかりの砂礫堆積層中に鎌倉期の遺物を混在した。この層には数層の断続する無遺物層があった。この層の上には更に1m余の土層を覆って現地表になっていた。ここに記さねばならぬ鎌倉期遺物包含層はこの状態から川中に流されてきたものが土砂とともに堆積したと考えられるものであり、上流に住む人達が川中にすてたもの一部と考えることができる。採集された遺物には次の如きものがある。最も多量なのは素焼皿（かわらけ皿）断欠、次に多いのは常滑焼陶片であり、次に古瀬戸陶片である。これらは日常生活に最も普通のものである。他に少量の青磁断片・白磁断片・硯断欠・古銭があった。青磁や白磁は高級品と思われるから庶民の日用品ではあるまいが、上級武士や寺などで使ったものであろう。硯は亀の彫刻のあるもの。古銭は宋錢。他に馬齒・海龜骨片その他不詳の骨片があった。

○鎌倉市上町屋の例

大船一江の島バス道の右下、天神山切通をすぎてすぐ右下方。もと土師器片散在地として知られたところの下方にある水田。三菱電機株式会社鎌倉製作所敷地工事により、ブルドーザーにて水田面をきりさげ工事中、昭和35年7月15日通り合わせて遺跡地が破壊中であることを知ったもの。水田下は土がやわらかくて入ってみることができなかつたが、きり下げられた水田下の土や、水田縁辺部の土中に土器片がかなりの量みられた。このとき採集した資料は土師器片・須恵器片・木片・木製品断欠・松かさ・桃のたね・魚骨などである。土師器片は壺や壺の断片で、壺の形態から鬼高式（7世紀末）が明らかであり、又平安初期の特徴を示すものもみられた。須恵器片は所謂国分式（8世紀後半）とよばれる土師器に伴うロクロあとと凸凹が目立つ壺断欠があり、高台のあるものもみられた。墨書き文字の一部が残るものもあり、少ないが貴重な資料を含んでいた。木製品断欠は25cmほどの棒状のもので断面が不正四角形、一端はやや薄く細く削られ、先が丸くしてある。他端は折れていた。ブルドーザーでふみ折られたものであろう。この遺跡は勿論生活遺跡であり、堅穴家を中心とした村落の一部であり、水辺にすてられた魔物が沼の中に残っていたものと考えられた。この部分を時間をかけて調査したらいろいろな木製品が出土したと思われる。土器片の年代からこの遺跡は7世紀末から8世紀を経て9世紀初にまで及ぶ時期のものと知られた。

○鎌倉駅地下道工事の例

一昨年だったと思う。鎌倉駅に下りたら、駅わきに地下道工事が行なわれていた。もう大半終っていたが掘り削った土層の断面に素焼皿片・常滑焼壺片・木片が出ていた。その日は工事関係者が誰もいなかったので土の捨場をきくことができなかつたが、傍に残された土の中から古銭1と青磁断片1をひろった。素焼皿片や木箸断欠はいくつもあった

が採集しなかった。

○鎌倉市役所工事場の例

鎌倉駅裏に市役所が建った。工事中に行ってみなかったので、出土品があったかどうかはわからない。掘り出された土がまだ山積されていたのでその間を見て歩いたが、素焼皿片・常滑焼壺片・木片・木箸断片はあったが目さす下駄は手に入らなかった。しかし青磁断片のかなり大きいものが1個採集された。割れ口が新しいのに他はない。側面に蓮弁をあらわした茶碗形のものの断欠であった。

○鎌倉英勝寺前の例

英勝寺前の道が下水道工事で掘られた。私が通りかかったときにはもう工事が終って、残土の山積があちらこちらにみられ、土中には素焼皿片・常滑焼壺片・木箸断片がみられるだけであった。

鎌倉市内は以上の例で知られるように土木工事があったところではどこでも何かしら土中から出ている。工事の初からみていれば進捗につれて多分、思わず出土品をみつけることができるであろう。それは鎌倉時代から室町初にかけて鎌倉に生活した人達が使ったものである。各国から集まつた多くの武士がいたから、武家屋敷で使ったものもあるうし、下級武士・小者・町民といった庶民の使ったものもあったはずである。横浜国立大学付属中・小学校の鉄筋コンクリート建築が行なわれたときにも、鎌倉警察署工事のときにもおそらく地下から多くの遺物がでたと思われるが、現場を見ることができなかつたし、土の捨場も聞いていない。今後ますます土木工事が多くなると思うが、現場あるいは土捨場に注意することがぞましいものである。

古代末期の県内状況を知る文献資料は極めて少ない。その時代を物語る伝世品も少ないし、諸種の遺跡も極めて少ない。そのころの県内が無人の境でなかつたはずだから、生活の場所には何かしら残されていることは間違いないことである。しかし今までそれがほとんどわかっていないのはその時代の遺跡や遺物に対する研究が進まないためだったとしなければならない。大山は古代人の崇めた山である。したがつて大山を中心とする地域に多くのものが残つていなければならぬはずである。日向宝城坊（薬師）や飯山金剛寺（阿弥陀）や金光明寺（觀音）に平安末の仏像が残り、大山山頂・飯山白山・伊勢原比々多神社境内・愛川八菅山・愛川幣山にそのころの経塚が残つていたのはそれを物語るもの。したがつて大山周辺地域に庶民生活あとが当然あるべきだと考へるがまだ発見されない。小田原市下曾我付近に千代庵寺があり、これをとりまく水田地帯から古代末期の庶民生活を物語る各種のものが発掘されたことは、酒匂川流域の古代末期を知る上にきわめて重要なことである。

○小田原市永塚の例

下曾我の永塚にある精神病院内で土取りが行なわれている現場に通り合はせたのは昭和34年3月下旬である。県教育委員会主催の千代庵寺跡調査をしたときである。周辺地域の状況をみまわっていたとき、土取現場に多くの土器片と木片が散在していた。土取場に入ってみると木片中には建築資材もあれば木製品の断欠もあり、土器片は大部分が土師器だが須恵器も弥生式土器もあり、瓦片もあった。桃のたねをはじめ色々なたねもあった。土

取の邪魔をせぬように出土品を採集した。田舟断欠・木槽断欠・その他木製品断欠・きぬたなどもあった。土師器片は平安初期の特徴を示すものがあり、これに伴出とみられる灰釉陶片や綠釉陶片があった。つづいて6月下旬の発掘調査によって湧泉に板廻した井戸を中心とする遺跡であることがわかり、水辺の湿地に不用品を投入したところと知られた。多くの木材や木製品断欠は土器片や瓦片とともにここに投入されたものだったのである。この調査で平安初期乃至奈良後期の庶民生活跡の一部が知られ、木製品各種が採集された。把手のある木槽完形品・きぬた完形品も入手できだし、文字を刻みつけた木簡や墨書した木簡も発見された。曲物の底板断欠、しゃもじなども採集された。特に多くの桃のたねが目立った。これらは平安初期の庶民生活を物語るものだったのである。

○小田原市高田の例

千代庵寺跡のある台地の南側水田は深田である。戦後排水工事が行なわれたとき多くの木材や枝が掘りだされたがこれにまじって木製品断欠や瓦片や土師器片もでた。瓦片は千代庵寺のものと同じだった。これに気づいた高田住の内田武雄氏はできるだけ多くの資料を集めめた。木製品中で特記すべきものはすりへった下駄1足である。前つぼが片よってあけられているのは古代下駄の特徴である。下駄の面には足指のあとがすりへってはっきりついていた。厚板に大きく段を刻みをつけた梯もめずらしいものだった。

県下には平安初期に特有な灰釉陶片が発見された場所が何か所かある。小田原市永塚・小田原市町畠・平塚市向原・平塚市四の宮・鎌倉市手広・横浜市港南台・横須賀市三軒家逗子市桜山などである。今後いろいろな方面から古代末遺跡の存在が知られるであろう。それはまだほとんどわかっていない古代末期の神奈川県を知る資料であり、やがて古代末期庶民祖先の生活を明らかにする糸口となるであろう。

昭和46年3月20日 印刷
昭和46年3月31日 発行

編集発行人 神奈川県立博物館
齊藤 太次郎
横浜市中区南仲通5の60
TEL(045)201-0926(代)
印刷所 株式会社 平井印刷所
横浜市南区高根町4の22
TEL(045)231-2607